

平成 21 年 5 月 18 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19510274
 研究課題名（和文） 大衆婦人雑誌にみる近代日本のジェンダー形成—誌面の多面的分析と読者調査
 研究課題名（英文） Modern Gender Order and Women's Magazines: Multiple Analysis of Articles and Research on the Readers
 研究代表者 木村 涼子（KIMURA RYOKO）
 大阪大学・人間科学研究科・准教授
 研究者番号：70224699

研究成果の概要：本研究の目的は、日本において近代的なジェンダー秩序の成立におけるマスメディアの機能を、戦前の大衆婦人雑誌を素材として明らかにすることである。詳細な分析をおこなうために、研究期間を通じて、公的図書館に完全な保存をみない大衆婦人雑誌と通俗小説などの古書史料を収集し確保に努めた。それらの史料をもとに、誌面構成分析・テキストにあらわれた価値観に関する意味論的分析、グラフィック情報分析・実用記事の数量的分析・連載小説の物語構造分析など、多面的な内容分析（content analysis）をおこなうことにより、近代初期の婦人雑誌が有していたジェンダー形成に関わる社会的機能の全体像を明らかにした。また、婦人雑誌の作り手の関係者および読み手にインタビュー調査によって、誌面分析の結果を、作り手と読み手の相互作用という現実 に即して解釈すべく、考察した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：ジェンダー・近代家族・マスメディア

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代初期に大衆化する婦人雑誌に関する欧米におけるメディア研究は、90年代以降盛んに成果を挙げている。日本でも、史料としての婦人雑誌を整理するとともに、それらの位置づけを考察する女性史研究が着実に積み重ねられているし、個別の研究テーマを追究するために婦人雑誌を分析の素材とし

てとりあげる研究も増えてきているが、婦人雑誌というメディアそのものを近代化の文脈に位置づけて社会的に扱う研究はまだ十分に展開されていない。

本研究はマスメディアを分析対象とした歴史社会的な研究の中に位置づけられる。本研究が切り開こうとしている新しい地平は以下の四点である。第一に、マスメディア

の誌面に対する数量的な内容分析と質的分析を組み合わせようとしている点、第二に、分析に際して恣意的な資料の恣意的な扱いに終わらぬよう、できるだけ網羅的に分析対象を把握するために膨大な量のデータの収集・分析を試みていること、第三に、活字記事だけでなく、グラフィック情報と連載小説という読者の想像力を掻き立てるファンタジックな側面を統合して誌面分析を試みようとしている点、第四にメディア研究で常に課題として浮かび上がる受け手分析に本格的に取り組もうとしている点などである。

(2) 研究代表者は1989年より、日本において近代的な女性像および性役割意識や家族観が成立するプロセスを、マスメディア、特に大衆向け商業雑誌を素材として明らかにすべく、大正時代に創刊され戦後も続いてきた婦人雑誌『婦人公論』『主婦之友』『婦人倶楽部』などを取り上げ、誌面に関する内容分析を行い、各種の研究成果を蓄積してきた。

まずは、さまざまな価値観・メッセージを含んだ誌面を、できるだけ数量化し、客観的な実証的データとして整理することをめざした。この段階の成果としては、数量化された誌面の傾向性に関するデータに、特徴的な記事という質的データで「肉付け」することによって、婦人雑誌が読者に伝えていたメッセージを浮き彫りにすることができたと考えている。

第二の段階では、特定のメッセージを伝えていた婦人雑誌が読者にどのように受容されていたのかに接近しようとした。その際の主要な素材は、婦人雑誌の読者欄である。読者欄から読み取れる、読者のプロフィール、読者が雑誌に何を求めていたのか、読者にとっての雑誌の意味、そしてそれらの時系列的な変化を追うことによって、メディアと受け手の関係性にアプローチした。

以上二つの段階を経て、婦人雑誌の誌面の中でメインの位置を占める、評論・実用などの一般記事(テキスト情報)だけでなく、一見副次的に見えるが、読者にとって重要な意味をもっていた(すなわち読者にとっての魅力を構成していた)情報も含めての多面的な分析を目指す。

2. 研究の目的

(1) 本研究の第一の目的は、日本において近代的な女性像および性役割意識や家族観が成立するプロセスを、マスメディア、特に大衆向け商業雑誌を素材として明らかにすべく、大正時代に創刊され戦後も続いてきた婦人雑誌『婦人公論』『主婦之友』『婦人倶楽部』などを取り上げ、誌面について多面的・複合的に分析し、婦人雑誌の機能を再統合することにある。その際、ジェンダー規範に関わる価値観が明示的に示されている評論などの

テキスト情報のみならず、価値観とは一見無縁にみえる実用記事、表紙やグラビア、・広告などのグラフィック情報、連載小説などのエンターテインメント記事などを重視する。これらは従来学問的にも見過ごされることが多かった要素であるが、とりわけ女性向けの通俗小説は文学研究はもちろん歴史研究上もほとんど無視されてきたと言っても過言ではない。しかし、本研究では、女性に発信されていたジェンダーに関わる価値観を分析するために欠かせない史料と考える。

(2) 誌面から読み取れる読者像には限界があるため、昭和初期に実際に婦人雑誌を購読していた人たちへの聞き取り調査によって、新しい局面を拓いていきたい。1930年代にかけて婦人雑誌の読者であった可能性が高い、当時の女子教育機関であった高等女学校の在学・卒業生(現在80歳から90歳)の方々にコンタクトをとり、「生の言葉」としてのドキュメント資料を収集し、具体的な個別の女性の人生においてマスメディアが持っていた意味を掘り起こしたい。誌面の多面的な分析と、当時の読者の「生の声」を結びあわせることによって、人々の生活世界におけるマスメディアの位置を立体的に描き出すことが、本研究課題の最終的なねらいである。

3. 研究の方法

(1) 1910年代から1945年までの30余年間の『婦人倶楽部』『主婦之友』『婦人公論』『婦人世界』などに関して、現物(古書)およびコピーを収集し、これまで中心的に分析してきた評論や座談会などの、ジェンダー規範や価値観があらわれやすい記事のみならず、毎号膨大に掲載されている実用記事について、数量的分析をおこなう。その際には、内容分析(content analysis)の基本文献であるB. ベレルソンの研究に基づき、恣意的な分析結果を排するために、記事の「形式」によって数量化し、次に意味論的な価値観抽出の手法を開発しながら記事の「意味内容」を浮き彫りにすべく数量化を試みる。

(2) 先述の該当期間の『婦人公論』『主婦之友』『婦人倶楽部』に関してはすでに表紙をモノクロ・コピーとして収集してあるが、表紙の色彩も重要な情報であること、表紙のみならずグラビアなどのグラフィック情報を分析するために、現物(古書)およびカラー・コピーを収集し、分析する。収集した図像データをスキャナでコンピューターに読み込み、電子データ化する。電子データ化した図像を基に、それらの特徴や傾向を把握するための分析軸や概念を定式化し、数量化の作業によって、時系列的な分析やメディア間比較や国際比較を可能にするような分析手法を開発することをめざす。

(3) 連載小説については、1920~1930年代に

映画文化とともに隆盛を誇った女性向けの大衆小説（現代的な題材を扱った「通俗小説」）の全体像を明らかにすべく、史料の収集と分析をすすめる。菊池寛のような一部の例外をのぞいて、通俗小説作品はほとんど図書館にも所蔵されていない。それらの作品については、連載されていた雑誌のバックナンバーからコピー資料として収集するか、古書市場において単行本を入手する必要がある。雑誌のバックナンバーとしては、『主婦之友』と『婦人倶楽部』について、毎年の人気小説として大きく誌面でも大きく扱われていた作品（映画化されたか否かということも、人気をはかる基準の一つとする）を中心に収集する。古書市場における単行本の収集については、多くの通俗小説作家のうち、加藤武雄に焦点をしぼる。加藤武雄については、親族や知人に対する聞き取り調査をおこない、作品の背景となる生活状況・価値観、通俗小説作家としての活動の実態も明らかにする。

(4) 近畿県内の旧制高等女学校の同窓会組織に協力を依頼し、現在 80 歳から 90 歳の年齢層で聞き取り調査に協力いただける方を、郵送依頼によって募る。郵送依頼によって得られた調査協力者（女性約 10 名を予定）を訪問し、聞き取り調査を実施する。聞き取り内容から婦人雑誌やマスメディア情報全般に関わる事柄を抜き出し、婦人雑誌の誌面分析と対応させて考察する。

4. 研究成果

(1) 婦人雑誌の毎号に掲載される膨大な量の実用記事の数量的な分析結果は、主婦が必要とする知識と技能が近代化の進展とともに多様化・複雑化するプロセスを示している。産業化を背景に、さまざまな新しい職業が誕生したが、主婦という仕事もまた新たに生み出され、そのノウハウを集積し伝達する重要な装置が婦人雑誌であることがわかる。それらは、村落共同体や「家（イエ）」から外部化された医療・ケア・家事・育児機能が、プライベートな領域としての近代家族の主婦に集中するとともに、貨幣によって購入可能な商品やサービスとして拡大していった結果でもある。社会に増えた職業・専門家の数だけ主婦の業務も増大していく。近代家族と職業世界は入れ子構造になっており、各分野のプロが主婦に指南する場が、婦人雑誌という情報空間だったのだ。実用記事の主要なキャッチフレーズが、「しろうとでも出来る」であることから、主婦は料理からインテリア、小児医療や愛児教育まで、すべての領域のセミプロであることを期待されていることが推測できる。

(2) グラフィック情報の数量的分析の結果としては、表紙の美人画の画法・服装・髪型・ポーズ・顔の輪郭とつくり・表情・彩色など、

さまざまな面で、大衆的な婦人雑誌に共通する時代的変遷と、雑誌ごとの特徴の両方が明らかになった。『主婦之友』や『婦人倶楽部』など主婦向け大衆婦人雑誌においては、特徴によって時期区分した際に、同一の時期カテゴリー内においては、画家が同一である場合も、画家が変わった場合も、女性像の基本的特徴が類似する。これらの知見は、グラフィック情報もまた、テキスト情報と同じように、特定の時期に特定のジェンダー規範を女性読者に提示していたことを示す。図像で示される「美しさ」は、あるべき女性の容姿と振舞い方のみならず、それらと結びついた役割規範を雄弁に物語っている。数量化の結果が明示する類似性は、それを証拠づけるものである。

(3) 連載小説については、大正末期から昭和期にかけて婦人雑誌や新聞紙上で女性向けの通俗小説作家として活躍した加藤武雄を中心に研究をすすめた。加藤武雄は、神奈川県農家（旧家）出身で、高等小学校卒業後、小学校教師をしながら投稿活動をおこない、新潮社の記者を経て、商業作家となった人物である。もともとは農民文学を志していたが、大正 11～12 年に『婦人之友』に連載した「久遠の像」が大ヒットしたことをきっかけに通俗小説作家の道を歩む。彼は多作な流行作家であったにも関わらず、その作品のほとんどは図書館にも所蔵されておらず、10 年ほど前より古書市場を通じての収集をおこなってきたが、本研究期間においてさらに収集をすすめることができた。それらの作品には、美しい「処女」と「妖婦」、朴訥な男性の純情とインテリ美青年の無責任、農村と都会、平凡な幸せとロマンティックな恋愛などの、印象的な対比が共通するモチーフとして盛り込まれている。強姦や望まない妊娠、裏切りなどセンセーショナルなドラマが目を引くが、その中に、性的な経験を経て獲得される女性美、子どもへの母性愛と父性愛、人間にとって生きがいとは何かという問いかけなど、ヒューマニスティックなテーマが流れていることも重要な特徴といえる。

加藤は、通俗小説を書くにあたっては、「道徳性があること、情緒的であること、救いのあること」といった理想を掲げながらも、葛藤を抱えていたとされる。彼のライフストーリーについては、親族の方 2 名に聞き取り調査をおこなうことができ、文献で判明する事柄以上にアプローチすることができた。家庭環境や郷土、流行作家となった後の生活などについての聞き取りから、彼の作品に通底するモチーフの解釈をより深めることができた。

(4) 読者層であったと考えられる女性への聞き取り調査については、個人情報との関係で旧

制高等女学校の同窓会組織のご協力を得ることができず、当初予定していた郵送での調査や聞き取り依頼を実施することができなかった。結果として、個人的なネットワークを通じてごく少数の方（旧制女子専門学校卒業）に聞き取り調査をおこなうにとどまったが、聞き取りの中で、マスメディア化が実現していた昭和初期には人格形成におけるメディアの影響力が増していたこと、マスメディア受容と学校教育体験の関係性が示唆された。

(5) 以上のような多面的かつ総合的な分析を通して、「婦人雑誌」を単なるメッセージの乗り物として断片的に分析対象とするのではなく、近代化のプロセスで不可欠な役割を果たした社会装置として、その全体像を描き出すことができた。

主婦向け婦人雑誌には、三つの相がある。第一が規範の相、第二が技能の相、第三がファンタジーの相であり、読者は、規範によって方向づけられ、実用記事によって下支えされ、ファンタジーによって内面からの原動力を得て、そして「主婦」になる。第一の規範の相とは、「～であるべき」の世界である。主として評論記事において、近代的「主婦」および家族・夫婦・親子のあるべき姿、価値観や理念を提示する機能を担う。第二の技能の相は、「～する」「～できる」の世界である。主として実用記事において、近代的「主婦」という新しい労働のスタイルと技能、内容を確立する機能を担う。第三のファンタジーの相は、「～したい」「～でありたい」の世界である。小説やグラビア・表紙絵・芸能情報・スキャンダル記事において、近代がもつめる女性性に関わる欲望を喚起する機能を担う。ファンタジーの相は、「主婦であること」への情動を生み出す。「主婦」の欲望を掻き立てるとともに発散させる仕組みも装備し、家庭・親子・夫婦に関する「ロマン」文化を形成する。読者は、規範によって方向づけられ、実用記事によって下支えされ、ファンタジーによって内面からの原動力を得て、そして「主婦」になる。

社会装置としてのジェンダー秩序形成上の機能を明らかにした本研究は、本格的な読者調査などの課題が残されているものの、マスメディア研究およびジェンダー研究上、新たな一步を付け加える意義をもつ成果を出すことができたと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計1件)

①木村涼子、吉川弘文館、近代日本におけるマスメディアとジェンダー秩序、2009年(印刷中)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 涼子 (KIMURA RYOKO)

大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授
研究者番号：70224699

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし